Ⅵ　４系列の学び

１　郷土・環境系列

（１）花植え交流

①目的

草花の活用を通して高齢者や幼児、その保護者、施設職員など異なる年代との交流を持ち、地域とのつながりを深める。普段は学ぶ側の生徒が、教える側に立つことによって深い学びへ結びつける。

②内容

３年次農業科目「総合実習」の学習において、栽培した草花を地域の福祉施設へ年間２回（春６月・秋 11 月）配付した。配付先は、松阪市立子育て支援センター「かんがるー」、老人福祉施設「さくらんぼ」の２施設。前年度までは「かんがるー」で幼児へ花植え指導を、「さくらんぼ」で施設利用者との簡単な交流をそれぞれ行っていたが、感染予防の観点から直接対面することは断念した。代わって、栽培した花苗および植え込んだプランターの配付のみとした。

③検証

本校より約５km 離れた「かんがるー」へ職員が花苗を運搬し、本校前の「さくらんぼ」へは生徒がプランターを直接搬入したが、高齢者との交流は遠慮した。直接交流が難しい状況に変化がなくとも、花苗栽培や作成したプランターの配付によるつながりを、次年度以降も継続したい。

（２）ルピナス花壇の管理

①目的

飯南･飯高地域を訪れる方々に向けたオープンガーデンの管理の一端を担うことを通して、地域活性化やホスピタリティについて考える。

②内容

本校付近にマメ科草花ルピナスの畑（花壇）がある。国道 166 号沿いにあり、毎年最盛期の５月には多くの観光客が立ち寄るほど、多数のルピナスが咲き誇るフォトスポットである。ところが昨年５月に管理者の方が急逝され、その後は家族の方が栽培管理を引き継ぐことになった。３年次の学校設定科目「郷土の自然」でルピナスを教材に利用させていただいた縁があり、所有家族の方に協力する形で花壇管理（除草２回）を学習に取り入れた。

③検証

ルピナス幼苗期の 12 月～１月の管理作業は目立たない活動だが、開花最盛の５月に結びついたときに、わずかでも関わりを持った自負を持って欲しいと願う。次年度以降、所有家族の方と協働する機会を検討したい。

２　介護福祉系列

（１）学校設定科目「コミュニケーション技術」～看板プロジェクト～

①目的

地元企業と協働し、学校近くにある企業の案内看板をリニューアルすることを通して、地域の課題や活性化に貢献する態度を身に付ける。また、企業見学や説明を通してコミュニケーションをはかり、企業の意図を確実にとらえ、看板製作の発案、協議そして提案まで、生徒が協働する技術を身に付ける。

②内容

昨年度の９月から「ボランティア基礎」の授業において、提案企業である地元の株式会社三ツ知製作所の方から、看板のねらいや地元飯南・飯高地域を活性化したいという思いを伺った。工場見学や説明を聞き活動していたが、昨年度２月頃からのコロナ禍で休止となった。

生徒は３年次生になり、活動は「コミュニケーション技術」の授業に引き継ぎ、授業選択者１名を昨年度から新たに加え、６月から活動を再開した。学校内外での活動が制限される中、地域の魅力を踏まえた看板作りを目指し、近隣地区の散策や学校周りの魅力探しから始めた。

カリキュラム開発等専門家の浅野吉英氏から今年度もアドバイスをいただきながら、看板アイデアの出し方を学習した。コロナ禍によって浅野氏が兵庫県から来校することが困難になる中、オンラインでアドバイスを聞きながら継続し活動した。

生徒が出した 100 近くのアイデアから協議し、30 くらいまで絞り込み、さらにキーとなるアイデアを絞り込んだ。「会社が何を作っているかわかるように」、「いつか働きたくなるような」、「見るなと言われたら見たくなる仕掛けを使う」、「飯南飯高の魅力はホームページで見てもらう」という方向性を担当者に確認すると、大変気に入っていただき、激励の訪問までしていただいた。そんな矢先、コロナ禍の第三波もあって提案までの運びに支障をきたし、校内の取り組みとしてアイデアの図案化とプレゼンの完成までが完了した。ただ、最終的には企業の同意は得られず、次年度へ活動が継承されることとなった。

③検証

１年半に渡る活動で看板製作まで至ることはできなかったが、生徒は得がたい実践的なコミュニケーション技術や体験をすることができた。看板のアイデア出しでは浅野氏より、「マインドマップ」や「ブレインストーミング」などの実用的な方法を学ぶことで、生徒はアイデアを出していくことが素早くなっていった。また、仲間の意見に「いいね、そして」と肯定的にアイデアを盛っていく方法も、しっかり習得していった。

また、企業のことを理解する中で、飯南・飯高地域は山間部でありながらも海外の工場へとつながっており、地元が世界につながっていることを実感できた。そして生徒は「身近にこんなに高い技術の会社があること」に気づき、新たに地域への誇りが生まれた。地域の魅力が工場の中にもあることに気づくことができた。

（２）「介護実習」～住宅改修業者から学ぶ～

①目的

コロナ禍において、予定されていた 15 日間の福祉施設での現場実習が中止となった。可能な限り現場での実情を学び、学んだ知識を将来活用できる見通しをたてる。

②内容

９月、本校の卒業生であり住宅改修専門業者として活躍している建設会社勤務の堀内寿哉氏より、住宅改修の現状について介護福祉系列３年生８名が学んだ。生徒は昨年度から住環境コーディネーター３級の資格取得のため、週２時間、福祉や建築など支援が必要な方の生活空間としての住居について学習してきた。堀内氏は様々な仕事の経験があり、ホテルでの接客、福祉用具の会社やアルバイトでの経験など、すべての経験が現在の仕事に活かされていることを生徒は学んだ。

③検証

授業で学習した手すりを実際に持ってきてもらい、素材によって手触りが全然違うことを実感できた。また、初めて見る手すりをつなぐ部品など色々な用途や好みに合わせ、組み合わせ方があることを知ることができた。生徒の一人は、「手すりをつけるという作業でもその人の一日の生活を考え、一番使いやすい位置につけるなど、ちょっとした心遣いが素敵だ」と感じていた。

（３）「介護総合演習」～地域を支える福祉事業者から学ぶ～

①目的

飯南・飯高地域の福祉の現状をグループで調べ、課題を見つけてその改善策を探ることで、身近な課題を解決する力をつける。

②内容

９月から地域の福祉の現状を調べ、実際どのような福祉ニーズが地域にあるのか専門家から聞いてみることになった。10 月になり、松阪市第三地域包括支援センターの方々から、地域の高齢化の現状を介護福祉系列３年次生８名が学んだ。様々なサービスがあることを知る中で、この地域は介護予防の自主グループが多く盛んであることを学ぶことができたため、実際訪問して交流することになっていたが、コロナ禍の第三波のためやむなく中止となった。

③検証

交流の中止は残念であったが、元気な高齢者がこの山間部に多いということを知ることができた。さらに、この地域の新たな魅力を気づくことができた。

３　総合進学系列

（１）学校設定科目「社会科学入門」

①目的

本科目は高大連携授業として、県内大学から行政学、看護学、教育学、経済学を専門とする教員を講師として招請し、各専門分野の講義や演習を通じて学問に対する興味・関心を育み、社会科学を中心とする学問の基礎的素養を養うことを目的としている。３年前より少しずつ松阪市の政策や地域の魅力について考える時間を確保し、各専門分野と関連した地域の題材をもとにして学びを進めている。

②内容

今年度は４，５月の臨時休業期間や新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、３名の教員に来校いただいた（例年は４名の教員が来校）。大学教員が隔週で高校を訪問し、高校教員とのティーム･ティーチングによりリレー方式で授業を行い、その翌週は内容に関するレポート・プレゼン作成をおこなう。今年度の教員（専門分野）と講義内容は、以下の通りである。

・村林　守　三重中京大学 名誉教授（行政学）
　私たちにとっての「地域」とは（6/23）→レポート（6/30）
・中西　良文　三重大学教育学部 教授（教育学）
　地域学習の授業計画を考える（9/15）→授業計画作成（9/29）
　授業計画の共有と改善（10/13）→最終の授業計画作成（10/20）
・内田　秀昭　三重大学教育学部 准教授（経済学）
　地方創生と農業（10/27）
　　→農業の６次産業化を考えるプレゼン作成（11/10）
　６次産業化のアイデア発表、地方創生と地域通貨（11/17）
　　→レポート（授業時間不足のため宿題）

例年、村林先生の講義により地域を考える動機付けをいただくが、あえなく臨時休業期間となった。そのため、期間中に高校教員による初のオンライン授業を行い、『地方自治のしくみがわかる本』を精読して行政学の基礎知識を高めた。休業明け初授業では、プロフェッショナル仕事の流儀「答えは、地域にある ～地方公務員、寺本 英仁～」を視聴し、なぜ地域を活性化するのか、どのように地域を活性化させ、どのような課題や困難があるのかについて理解を深めた。また、「地域」や「ふるさと」という言葉について自分なりに考え、そもそも地域で生活する「幸せ」や「魅力」とはどういったものなのかグループ学習をしながら追究していった。

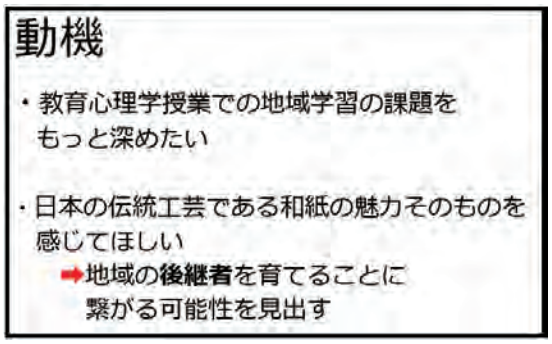
その後、村林先生の講義は１度のみの実施となったが、地域の人口減少や課題について学習した。そして、地域とどのように関わって生活するのか、地域ではどのような行政サービスがあるのかレポートで取り組んだ。生徒からは「若者の農業に対するイメージを変えて、農業体験をするとどうだろうか」、「祭りやスポーツ大会で多くの方と関わり、地域交流を広げていってはどうか」などの意見が出た。

中西先生の講義では、中学１年生対象の地域学習の授業計画をグループに分かれて取り組んだ。まず「良い学習の４つのポイント」についてジグソー法を用いて学習し、「自己積極性」「協同」「現実の問題」「モノをつくる」の視点を取り入れた授業プランを考えた。生徒は授業の題材として、「空き家」「地域の魅力と課題」「深野和紙」を取り上げ、昨年度フィールドワークの内容も盛り込みながら設計した。

最後の講義となった内田先生の授業では、食料自給率を軸としながら新しい農業の在り方を考えた。農業の６次産業化を考えて、「野菜として商品価値の低いものをお菓子として加工する」「地元農作物をブランド化し、栽培→加工→料理の過程を一貫して地元料亭で行う」といったアイデアが出た。

高大連携授業以外にも、「興味のあることと地域との関わりを考えよう」と題して、夏休み前に生徒自ら主題を設定して地域に関する内容に取り組んだ。昨年度と同様に、自分自身の興味のあることをマインドマップの作成を通して可視化し、その関心事に関連する松阪市の政策を調べながら、16 分割メモによるまとめを行った。

今年度の学年末の研究発表会（2/16）では「地域×分野×興味」を主テーマとして、これまでの学問分野に関するものや夏休みに取り組んだ内容と地域とを掛け合わせて、新たな価値創造を考えるアイデア出しを行った。この研究発表会には大学教員だけでなく、関わってくださった地域おこし協力隊の方々にも参観いただいた。さらに初のオンライン配信を実施し、県内外の高校教員とも繋いで講評を受け、来年度「いいなんゼミ」のテーマ設定へのきっかけ作りとした。



③検証

今年度２年生は、昨年度「産業社会と人間」において地域でのフィールドワークを経験した生徒である。そのため、地域を軸にした学習活動が例年以上に自分ごととなっており、生徒個人へ落とし込まれたものになっていると感じられた。そのこともあり、研究発表会のテーマでは「空き家で天体観測」「保育士×木綿」「深野和紙と教育」「松阪の地域通貨」といった、これまでの学びを踏まえた発表に繋がった。さらに、自らの進路と繋げて「田舎で美容師が稼ぐには」としてビジネスプランを考える生徒も登場した。また、生徒アンケートからは「正直大学の先生の授業やレポートは大変だと思うけど、自分ごととして考えると少しずつ面白くなる」「好奇心と興味を持つことが大切」といった声もあった。昨年度からの地域を軸とした学びが今年度の系列の学びに連動しているという実感を、生徒・教員ともに持つことができた。そして、「自己の在り方生き方を考えながら、より良く課題を発見し解決していく」という探究要素を持った学びにも繋がったと感じられた。次年度はさらに学びを深められる仕掛け作りや、地域の声を聴く時間も確保していきたい。

４　コンピュータ系列

（１）マーケティングの取り組み

①目的

マーケティングに関する基礎的・基本的な知識や技術を身につけ、適切に活用できる能力を養う。また、バーチャルカンパニー（仮想企業）を設立することで現実の社会の課題や産業の仕組みなどの理解を通じて、国際化・情報化時代に対応する起業家精神を養う。

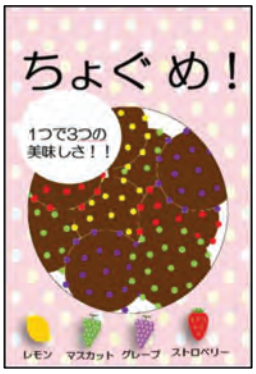
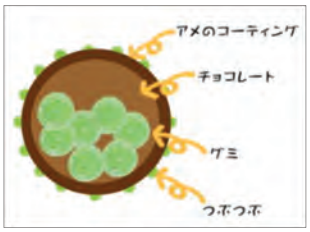
②内容

選択生徒 13 名を３つのグループに分け、バーチャルカンパニーを設立。

各社オリジナル商品の企画・立案。会社の中でデザイン部とＣＭ部に分かれる。

デザイン部→会社のロゴと商品のパッケージをデザイン

ＣＭ部→商品ＣＭの絵コンテを作り、ＣＭ動画を作成

社名	藤株式会社	西村株式会社	７２６PRODUCTION　猪野田第八商店
ロゴ	藤	NISHIMURA	726
企画商品	ふじ 877 チョコ 	ちょぐめ！  	救急君７２６号 ～内容～ ・メタルマッチ ・ピンセット ・十徳ナイフ ・ライト ・ゴムチューブ ・アルコール ・湿布 ・ポイズンリムーバー ・包帯（大・中・小） ・サージカルテープ ・安全ピン 簡単に持ち運びができる応急処置セット。
商品説明	【商品名】 藤８７７チョコレート 【ターゲット】 子供から大人 【目的や狙い】 小さなバナナの形のチョコで、だれでも食べやすく見た目も楽しい。商品名でもインパクトをもたせる。	【商品名】　ちょぐめ！ 丸いチョコの中にフルーツ味のグミを入れ、アメでコーティングされたお菓子 【ターゲット】 子ども、大人 【目的や狙い】 チョコレート、グミ、アメを一緒にすることで、ターゲット層を広くしたい！！  	【商品名】救急君７２６号 【ターゲット】出かける予定のある人で行き先を不安に思う人、または子供を連れている人。 【目的や狙い】応急手当を目的として作成された救急君７２６号は、ただ応急手当ができるだけでなく遭難や災害避難の時にも支えになってくれます。

（２）電子商取引の取り組み

①目的

ビジネスにおける電子商取引の意義や役割を理解するとともに、ウェブページを用いて情報を効果的に伝えるための基礎知識や分析・企画・立案・制作・公開の手法を身に付ける。また、電子商取引の大事な要素にウェブデザインと広告・広報という内容がある。地元地域の取り組みを理解し、確かな情報を発信する知識と技術を養うとともに、地元地域に貢献できる人材を育成する。

②内容

ア　飯南高校オリジナル商品「木の手帳」のラッピング企画

本校の應援團 Circle の１人から、地元企業と協力して制作した「木の手帳」をもっと世の中に広め、全国各地に発信していきたいという想いを受け、何かお手伝いできることはないかと考えた。その結果、「木の手帳」をより良く見せるためのラッピングを企画し提案した。木の手帳の自然の良さと、本校シンボルのハナノキの赤をテーマにしたラッピングになるよう工夫した。

イ　松阪保護司会とのコラボレーション

地域の犯罪防止や非行をした人の立ち直りなどに取り組む松阪保護司会より依頼を受け、地域の犯罪防止や啓発のために発行される広報誌「保護司会だより」の表紙と裏表紙のイラストを作成した。若い世代にも活動を知ってもらう目的のため、若い世代の発想力を生かし、高校生が作る斬新な内容をと希望された。そこで、昨年度マーケティングの授業でブランディングを行い、本校のイメージキャラクターを手掛けた５名の生徒が案を出し合い、若者が上を向く前向きな気持ちを表現したイラストと４コマ漫画が完成した。

③検証

今年度は新型コロナウィルス感染症の影響もあり、思うように地域と協働できる取り組みができなかった。その中で松阪保護司会との活動は高校生の若い力で関わることができ、今後につながる内容であった。

今後は、昨年度コンピュータ系列の生徒が作り上げた学校のキャラクターを使い、地元企業と商品開発等を行い、本校のある飯南・飯高地域を若い力でより盛り上げ、地域の良さを全国にアピールできるよう発展させていきたい。

Ⅶ　授業改善にかかわる研修

１　「主体的・対話的で深い学び」のための授業改善研修会（第１回）

（１）目的

コロナ禍においても自律的な学びを進めている他県の取組を知り、探究活動に自走する生徒を育むためにどのような授業が必要なのか、その授業をした結果、校内でどのような変化が起こるのかを学ぶ。また、オンラインでの授業実践を学び、今後の学びの変容について理解を深める。

（２）内容

６月 26 日（金）、宮崎県立飯野高等学校の梅北瑞輝先生を講師として、Google Meet を使用したオンライン研修を行った。探究的な学びを校内で積極的に進めてきた結果、コロナ禍であっても自走する生徒が出てきたことをお聞きした。また、オンライン授業は手探りからのスタートだったものの、そこから生徒は探究を自走させて他校との繋がりも起こり、オンライン研修にも発展した事例もうかがった。

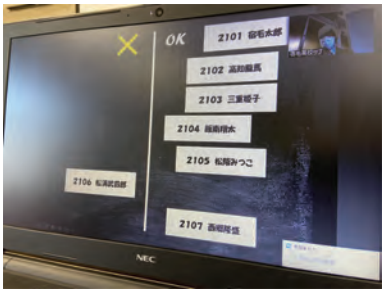
（３）検証

梅北先生から「関わっている大人が支援して伴走してくれているのが良い」と意見をいただき、いいなんゼミや部活動などで探究活動に関わっている教員が、生徒と地域の大人とを繋いで伴走してもらう流れを少しずつではあるが作ることができた。また、リアルとオンラインとを併用した異校種交流も進むこととなった。

２　「主体的・対話的で深い学び」のための授業改善研修会（第２回）

（１）目的

日常的な授業での学び合いのスキルやルールについて学び、授業実践を通して自らの授業へ活用できることを学ぶ。また、授業デザインや振り返りの言語化の方法についても学び、これからの自己の授業を内省することを目的とする。



（２）内容

１月 20 日（水）、高知県立宿毛高等学校の小島大和先生を講師として、zoom を使用したオンライン研修を行った。授業開きにおいて授業でつけたい力を生徒に示し、ネームプレートによる誰も見捨てない授業実践を発表いただいた。生徒が学び合うことで全体的に少しずつ生徒の様子が変容していき、R80 による振り返りの言語化によって、生徒自らが思考力や表現力等の成長を実感していくことも示していただいた。

（３）検証

本校と同じ小規模校での実践ということもあり、一人ひとりの成長を授業デザインして教室全体で創り上げていく様子が共感でき、アンケートでは「教えない指導とはいうが、ここまで生徒主体でやっていく実践には驚いた」、「知識を教えるだけでなくより知恵を使う時間をデザインし、活用できる力を育てたい」などの意見が出た。また、「R80 を実践してみたい」との声もあり、すでに実践している自校教員に授業実践の共有をはかる教員も出てきており授業改善のきっかけとなった。

Ⅷ　部活動での地域協働活動

1　美術部　【IINAN いいな！LETTER】

（1）目的

「IINAN いいな！ LETTER」の活動にある願いとは、新型コロナウイルスの影響で人と人や、人と社会との交流が少なからず分断されてしまったことにより、オンラインに置き換えられた人と人とのつながりをオフラインによって取り戻し、人と人とがつながる喜び、人から信頼され人を信頼できる安心感、そして同じ価値を「共有」する喜びなどを再び味わっていただきたいというものである。

（2）内容

今回の企画は、特に「共有」という考え方を土台としている。これまでの時代は、マイカーやマイホームなど何かを所有することこそが豊かさの象徴と考えられてきた。しかし、これからの時代は「所有」ではなく「共有」の時代が到来すると考えられており、すでにシェアハウスやシェアオフィス、カーシェアリングやリツイートによる情報の共有など、幅広い分野に広がりを見せている。新型コロナウイルスにより社会が一変し、私たちは様々なもの、特に身体的な距離から来る「心の共有」が難しくなったと感じたことがこの活動のきっかけである。

活動内容としては、本校敷地内にあるハナノキを見に来られたお客様が現地で紅葉を楽しむことに留まらず、お気に入りの紅葉した落ち葉を一枚拾っていただき、それをラミネートして私たちがデザインしたオリジナルハガキに貼ってお渡しする。そして、お客様からご友人などに手書きの文章を添えて送っていただき、「心の共有」を図っていただくというものである。

また、この活動が少しでも地元に活気を生み出すことにつながり、ハナノキの落ち葉が貼られたハガキをお客様からご友人などに送る「思い出のおすそ分け（共有）」により、ハガキを受け取ったご友人などにハナノキの魅力が伝わり、結果的にハナノキを見に来ていただければ、今後のお客様の誘致につながり交流人口が増加するなども考えた。

（3）検証

コロナ禍のオンライン中心の生活だからこそ、オフラインの肌感覚にこだわりたいと考えた。しかしオンラインの利点は活かしながら、紅葉が美しいと感じられる時期にご来場いただけるようにと、私たちの Facebook ページを通じてハナノキの見頃を半月にわたり毎日発信した。また、三重大学の坂本竜彦教授にはハナノキ広場でもご指導いただき、地域おこし協力隊の高杉亮氏からはハガキのデザイン指導を通じて伝えることの意味を教わった。3 日間の開催で一日平均来場者数は 50～60 名程度あった。松阪地区のみならず桑名市から和歌山県まで広範囲からご来場いただき、用意したハガキはすべて配布できた。期間限定であったが、今後企画を立案する際にもより多くの地域の方々に学びながら地域に根付いた活動にしていきたい。

１　應援團 Circle

（１）活動の目的

本校應援團Circleは「学校地域を盛り上げる」ことを目的に活動を行っている。地域の大人たちと積極的に関わり、高校生が地域のために出来ることを自主的に考えながら自分たちができる地域課題解決を行っている。

その中で、地域を知り郷土愛を育みながら地域課題を自分ごとと捉え、主体的に考える姿勢を身に付ける追究力、課題解決をするために大人や学生と深く関わりながらともに活動する対話力や創造力、地域の良さや自分たちの活動を効果的に多くの人に知ってもらうための発信力、これらの資質能力の育成を目指している。そのような力を伸ばしながら、生徒それぞれの自走力を身につけさせることを狙いとしている。

（２）活動の振り返り、学びの整理

昨年度から継続して取り組んできた「空き家片付けプロジェクト」や「日本一を考える会」、地域魅力発信のための商品開発（「木の手帳」）の活動について振り返りを行い、学びの整理をするためにコンテストへ参加する。すべての活動において校外の方と繋がり、発表においても地域の方に協力していただく。その中で自分自身にどのような変化があり、次のステップへどう進んでいくのかを仲間と共有する機会や、これまでの活動を言語化していく機会とする。その一貫として、次項（３）（４）のような活動に取り組んだ。

（３）第５回全国高校生ＳＢＰ交流フェアへの参加

①内容

ＳＢＰとは「Social Business Project」の略で、地域の課題をビジネスの手法を用いて解決していこうという取り組みであり、「未来の大人」である高校生を応援していこうと毎年交流フェアが開催されている。今回、北は北海道、南は沖縄まで全国 17 都道府県 24 校 26 団体が参加し、今年は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、オンラインで開催された。

これまで應援團では、地元の魅力を発信するために高校生が出来ることは何かという問いから、地域の歴史を学習し、地域資源を調べてきた。そして地域企業である、もくいち・マルゴ株式会社、沖中造林株式会社、浜佐建設と協働して商品開発を行って「木の手帳」を製作した。この取り組みについて、これまでのストーリーを整理し、鈴りん探偵舎のサポートをいただきながら言語化し発表した。７月に書

類審査を通過し、８月１、２日にオンライン上でポスターセッション発表を行った。このポスターセッションには 22 校が進出し、Ａ・Ｂ・Ｃの３グループに分かれてプレゼン５分（うち動画４分程度）、質疑応答５分の合計 10 分で、各校の生徒が自分たちの取り組みを工夫し発表した。本校生徒もこれまでの活動を振り返りながら、それらを言葉にし、動画作成や質疑応答の練習を重ね発表したところ、８月 23 日に行われるオーラルセッション６校に選ばれた。オーラルセッションでは、プレゼン 10 分（ライブ配信）、質疑応答 10 分の合計 20 分での発表となり、生徒８名でそれぞれ役割分担をしてこれまでの活動の発表を行った。

②検証（工夫した点・効果的だった点）

ア．昨年度の活動を整理し、発表する機会をつくる

ａ．振り返りに時間をかける

ｂ．商品開発を進める中で大人や社会の感覚を知ること、高校生なりの視点を伝えるための工夫、その中で得た気づきや変化の整理を行う

ｃ．地域企業と協同した商品が完成して終わりではなく、発表時にも連携して取り組む

ｄ．これまでの活動が自信となり、生徒自らが「発表したい」と意欲的な発言や行動力が現われた

ｅ．校内教員の生徒への効果的な声かけやサポート

イ．発表に向けての学びの整理

ａ．企業との対話の中で困った点や苦労した点を言語化

ｂ．商品が完成していく過程を言語化

ｃ．鈴りん探偵舎のサポート

ウ．オンラインを活用した準備

ａ．日本経済大学髙見啓一准教授からの助言

ｂ．鈴鹿大学・皇學館大学の学生による質疑応答練習

ｃ．動画作成やＣＭ作り

エ．表敬訪問・新聞記事

ａ．ＳＢＰ委員長の百五総合研究所荒木康一代表取締役社長へ表敬訪問

ｂ．高校生が取材依頼を行う

③成果と課題

発表の機会をつくることで、これまで学びを整理し、言語化していった。その過程で自分たちが行ってきた活動を自覚することができ、自信をつけ、発表に対しても意欲的に取り組む姿に大きな成長が見られた。そして、発表に向けての準備を生徒だけで行うのではなく、これまでの繋がりを活かして地域の方や大人と準備を進めることで、新しいチームワークを形成することもできた。中には、「サポーターからファンになった」という言葉もいただいた。また、地域での学びを「電子商取引」の授業と繋げ、ラッピングをどのように工夫すれば購入者に喜んでもらえるのか授業内で考えることで、実社会と繋がった学びを得る機会ともなった。

このように地域を知り、地域課題解決を高校生の視点で行うことを軸に進めていくことにより、生徒は自分たちで動き出す自走性を身につけることができた。しかし、「どのような生徒に育てたいか」という明確な視点が教員側に弱かったと感じる。さらに生徒の成長を加速させるために、大人側の伴走力が今後の課題である。

（４）マイプロジェクトアワードへの参加

①内容

マイプロジェクトとは、身の回りの課題や関心をテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通して学ぶ実践型探究学習プログラムであり、小さくても実際に起こす「アクション」と、プロジェクトに対する「主体性」を大切にしている取り組みである。３年生は「ＯＵＥＮＤＡＮ×地域創造」、１年生は「みんながハッピー！魔法のいいなんいいたかスーパーフード」というテーマで参加した。今年度はコロナ禍で活動が制限されたが、夏のＳＢＰ交流フェアでの発表を反省する中で、生徒自身が次の目標としてマイプロジェクトへの参加を決めた。

３年生はこれまでの地域との繋がりや、ＳＢＰで出来た新たな繋がりを活かし進めてきた活動、学校や地域を巻き込んでいった取り組みを中心に発表を構成した。そしてさらに、１年生から行ってきた自分たちの活動に対する当時のマインドから現在にかけての変化を整理し、３年生になった今だからこそ出来ることを目指し実践してきたことも織り交ぜた。

１年生は、３年生に引っ張られながら活動していく中で、自分たちが考えた活動をしたいという思いを軸に発表内容を整理していった。その中で、昨年度卒業生から引き継いだ「空き家片付けプロジェクト」を９月から10月にかけて実際に行った経験をもとに、空き家の再利用ができないかという問いが生まれた。空き家を片付

けたあと、空き家バンクへ登録してもらうだけでなく、高校生が地域の方の協力を得て、空き家でカフェを開くという内容で発表することとした。

②検証（工夫した点・効果的だった点）

ア．自走力を磨く

ａ．地域の大人へ自分たちから会いに行く

ｂ．自分たちのやりたいを関係者と対面し言葉で伝える

ｃ．高校生が取材依頼を行う

ｄ．地域の大人や企業からの質疑応答を何度も体験する

イ．地域を巻き込む

ａ．地域おこし協力隊と活動する

ｂ．活動してきたことを高校生が言語化し、地域の人と発表することで一体感をつくる

ｃ．地域の方を学校へ繋げる

ｄ．発表に向けての会議を鈴りん探偵舎と行う

ウ．学校を巻き込む

ａ．活動が授業と繋がるよう意識し行動する

ｂ．Circle メンバーだけでなく、校内の生徒と楽しさを共有する

ｃ．校内の協力者を増やす

エ．ＳＮＳを利用した情報発信

ａ．自分たちの活動を随時発信することで関係人口を増やす

ｂ．ＳＮＳを通じて、繋がりを増やす

ｃ．これまでの活動を動画で発信する

ｄ．ホームページ作成する

③成果と課題

マイプロジェクトに参加したことで、３年生はこれまでの３年間で得た学びと経験の深掘りが行え、自らの高校生活を工夫し発信することができた。そこには、「学校がある地域は田舎で何もない」など学校生活に対してマイナスなイメージから始まった生徒が、学校を飛び出し地域と活動する中で地域の温かさやたくさんの繋がりを得たこと、行動することの大切さを学び、それらを学校へ持ち帰って学校の仲間と「楽しい学校生活」を創っていった過程が詰め込まれている。ここでの楽しさとは、地域を巻き込み工夫をすればこれまで以上の活動ができるという意味である。この楽しさを普段の学校での学びに上手く絡めることができれば、学ぶ意欲の向上へ繋がっていくと考える。

１年生は、３年生や卒業生の活動に影響を受けながら「自分たちの問い」を見つけ、それに向けて行動することの大変さを学んでいった。アクションすることで繋がりができ、そこから自分たちに出来ることは何かという問いを見つけ、経験値を得た上でさらに行動して少しずつ自走力を身につけていった。今後はこれまでの活動の中で得た繋がりや経験を次世代に繋げていくことの工夫、さらには活動の継続がどこまで出来るのかが課題であり、学ぶ楽しさや学びの本質を得られるように接続していくことが必要である。